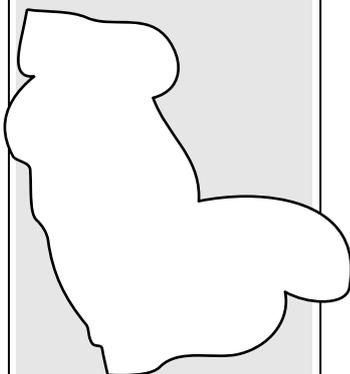


大玉村



大玉村長
押山 利一



面積 79.64km²
人口 8,416人
(H26・9・1 現在)



▲杉田川上流にある遠藤ヶ滝

●大玉村と阿武隈川

大玉村は、福島県のほぼ中央に位置し、郡山市、本宮市、二本松市と接しています。西方に、秀峰安達太良山があり、本宮市に向け扇状地状に広がっています。

阿武隈川は、本村と本宮市の市村界に沿って約1kmに渡って流れており、本当の空ときらきらと光る水に囲まれた所です。平成14年度に、この区間に本村と本宮市(当時白沢村)をつなぐ念願の安達太良大橋が完成し、地域間交流と産業振興に大きな役割を果たしています。

大玉村の面積は、79.64km²で、玉井地区と大山地区に分かれ、標高は、玉井の中心地で250m、大山は240m程度。昭和45年から圃場整備事業が行われ、水稲を主産業にしてきました。

村内には、安達太良山を水源にする3河川が北から杉田川、百日川、安達太良川とあります。全て阿武隈川に合流しています。

杉田川の上流には、遠藤ヶ滝他47の滝と遠藤ヶ滝不動尊があり、春と秋に祭礼があり、護摩祈祷や火渡りの行が行われます。

百日川には、小前ヶ岳から湧き出る百日清水があり、オートキャンプ場のフォレストパークあだたらが隣接しています。

公営宿泊施設のアットホームおおたまの他、村民プール、テニスコート、村民体育館、村民グラウンド、歴史民俗資料館のあだたらふるさとホールなど多様な施設があり、更にゴルフ場や温泉旅館などもあり小さくても楽しみのある所です。

また、遺跡や古墳も数多く発見され、古からの人々の暮らしが有ったことが伺えます。村全体の夏まつりや2地区の神社の祭礼が毎年行われるなど、地域の絆や郷土愛が大切に受け繋がれている地域でもあります。

●取り組みの現状

本村の水稲産業に不可欠な3河川の他の水路等の管理・保全も行っています。水道水源に利用している河川でもあるので管理は最重要としております。阿武隈川の支川であることから下流域のことを考え水利用や河川管理をしているところです。

また、災害時の応急処置や復旧のようなハード整備の他、我々の生活は少なからず環境へ負荷を与えていることから、影響を少なくするような生活様式が取り入れられるソフト施策にも取り組んでいます。

昨今では、地球温暖化の影響からか、年々河川氾濫のリスクが高まっているように思えます。河川に堆積している土砂や鬱蒼している植物等の除去を進めております。

一方で、再生可能エネルギーの導入が注目され、小水力発電所の設置有望な個所の選定を行っており、次ステップとして実施設計や発電所の建設に向け取り組んでおります。合わせて、地熱、地中熱のポテンシャルも期待できるので、地域に合った水を利用した再生可能エネルギーや省エネルギーの浸透を図っているところです。

- ・浸食災害時の補修、河川床の堆積土砂除去、災害未然防止の水路清掃等を関係機関と実施。
- ・全地区対象とした毎年の河川クリーンアップ作戦。
- ・合併処理浄化槽整備事業の継続。
- ・農業集落排水処理事業の維持。
- ・水の力学的エネルギー、温度差エネルギーの効果的な利用の摸索。
- ・地下水・湧水の保全。

●今後の課題

村内3河川や安達太良山の水を利用してきたことで生活や水稲が発展し、我々の暮らしが豊かになりました。今



▲大玉村の秋の田園風景（3河川が生活に密接に関与）

ある自然や農村風景を守り、この豊かな資源を次世代へ残すことは我々の使命であると考えます。

また、大雨となれば河川の氾濫から農地や人家等への被害が及ぼすことになり、今まで幾多の浸食災害、土砂災害がありました。近年では、局所的な集中豪雨やゲリラ豪雨などによる被害に見舞われ、経験に無い自然現象への水・土砂災害対応が急務になっています。

水資源という視点からは、飲料水(生活用水)、農工業用水、エネルギー利用の3点の利活用が上げられます。取り合い、不足、枯渇とならないような方策を取り、地域の貴重な資源を地域に還元し、豊かな暮らしに結び付けることが必要です。

阿武隈川流域の広大な自然条件や立地条件がもたらす自然の力を水文学⁽¹⁾から分析することも重要と考えます。

(1)水と物質の循環の個々の過程を定量的に把握する学問（国土交通省HPより）

●未来へのメッセージ

阿武隈川の環境を守ることは、支川の環境を保全すること及び流域全体からの影響（負荷）がどのように及ぼしているのか考えることです。20年前の阿武隈川の環境と比較し改善していることは、関係機関、関係者の努力の証と考えます。今後20年の取り組みが更に重要と思われれます。現在の事業を継続して展開するとともに水や河川に対する想いを復活させる必要があると考えております。

阿武隈川サミットが行ってきた事業は正に流域のつながりを感じさせるものでした。川に親しみを持つだけでなく、上流から下流、河口での人々の暮らしがどれ程関係があるかを学ばせるものが多く、上流部での植林活動や河口でのごみ拾いなど地域を超えた運動が印象的でした。

また、自然での活動を通して自立心を養うようなキャンプやカヌー教室など子供たち目線の事業もあり積極的に参加させる保護者もいらっしゃいました。

このような未来を担う世代の育成の活動が重要なのかもしれません。

昔は、水の確保は命を守るようでもありました。水田への引き水の紛争があり、堰や水路整備がされ、水は貴重な資源として使われていました。しかし、いつからか水は無尽蔵で無料、そして、河川には無関心というきらいになってしまいました。

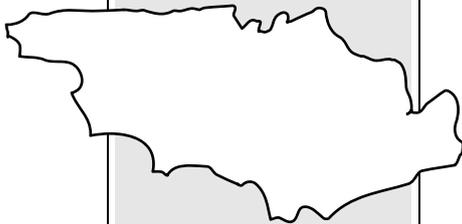
水は大切に使う。河川を大切に想う。そうすれば必然的に望ましい暮らしが構築され、河川が豊かになり、地域がより安心できる空間になると思われれます。

河川、地下水など水の持つエネルギーを新しい視点で捉えてゆかなければなりません。

二本松市



二本松市長
新野 洋



面積 344.65km²
人口 56,403人
(H26・9・1 現在)



▲カヌー教室を楽しむ子供たち

●二本松市と阿武隈川

二本松市は中通り地方の北部にあり、福島市と郡山市の中間に位置しています。昔から人々は、安達太良山を背景に、市街地には丘陵地が連なり、阿武隈川をこよなく愛し、緑と水に恵まれた環境の中で、自然と共に生きてきました。

阿武隈川は当市のほぼ中央部を南北に貫流し、支流となる杉田川、原瀬川、湯川、油井川、移川、口太川等の河川の周辺には、田畑等の耕地が広がっております。

また、かつては阿武隈川の行き来に際し難をきわめていた時代もありましたが、現在では、菅田橋、舟形橋、高田橋、安達ヶ橋、智恵子大橋、新舟橋と6本の橋がかけられ、交通・生活はもとより、本市経済の発展に重要な役割を果たしてきました。阿武隈川沿いには工業団地が立地しており、就業の場としても重要な位置づけがなされています。

また、市内の阿武隈川には、島山カヌーレーシングコース、阿武隈漕艇場が整備され、県、全国レベルの各種大会が開催されています。

このように、阿武隈川は人々の生活に深く関わり時にはやさしく、時には洪水災害というきびしい面を持ち合わせており、各種治水対策も実施されています。

阿武隈川は、今も昔も二本松市にとってなくてはならないものであり、昨今、河川の状態が壊れてきている中、清い澄んだ流れを再び取り戻すことが必要となっています。

●取り組みの現状

【1】阿武隈川上流流域下水道等の推進

阿武隈川流域別下水道整備総合計画に基づき、阿武隈川あだたら流域下水道事業（平成26年3月に阿武隈川上流流域下水道事業に再編）が県事業として着手され、旧二本松市及び旧安達町により、これに関連した公共下水道の施設整備に平成4年度から取り組み、下水道管渠布設工事を進め平成10年10月に一部下水道の供用を開始し、平成25年度末までに事業計画の約9割の面整備が完了しています。

流域関連公共下水道事業のほか、特定環境保全公共下水道事業として、旧岩代町により小浜地区について平成9年度から、旧二本松市により岳温泉街を中心とした地区について平成11年度から公共下水道の施設整備を進め、それぞれ平成16年度に一部下水道の供用を開始し、現在、施設の整備はほぼ完了しています。

これらの公共下水道事業は、すべて阿武隈川流域別下水道整備総合計画に位置付けられており、いずれも家庭等からの生活雑排水及びし尿を浄化し、自然にやさしい形で、阿武隈川へ流すことで豊かで美しい環境を大切に守っています。

【2】農業用施設整備事業の推進

二本松市では、農業用施設整備事業により農業用排水路の整備を実施し、農地の汎用化を推進するとともに、現在の社会情勢に対応可能な農地の高度利用を図り、さらに、農業の担い手の経営安定と担い手による優良農地の維持確保を図っています。

その中で、農業用排水路の整備においては、河川に流れ込む排水の環境への影響を考慮し、土側溝からU字溝への整備を効果的に推進しています。

【3】合併処理浄化槽設置整備事業の推進

排水処理施設としての合併処理浄化槽設置整備事業として、平成4年度から本事業に取り組んでおり、公共用水域の水質汚濁防止対策等、生活環境の保全に努めているところです。

本事業により補助金を交付しており、現在の設置状況は3,546基（平成26年3月現在）となっています。今後も本事業を効果的に推進していきます。

【4】水防災対策特定河川事業

二本松市は阿武隈川の治水対策として、関係機関と連携し、水防災対策特定河川事業を推進してきました。水防災対策特定河川事業とは、地形、流域などの特性から従来の対策が難しい河川において、洪水から人命、人家を守ることを最優先とした治水事業です。



▲安達太良山と阿武隈川

この事業によって早期に治水効果を確保することが可能となり、現在の土地利用への影響を出来る限り小さくすることが出来ます。本事業が完了予定である平成27年度までには住民と関係機関との連携強化を推進していきます。

●今後の課題

流域自治体での統一的な河川環境保全事業の展開が必要であり、包括的な浄化施設の設置を推進し、生活雑排水等の河川への水質汚濁を防止する対策が重要となっています。

さらに、阿武隈川水系に係る企業への水質汚濁防止法による放流規制の強化、流域水系の企業の本サミットへの参加、家庭生活雑排水等に関する婦人団体、育成会、町内会等への呼びかけも、今後必要となっています。

また、治水や水質汚染防止対策だけでなく、これからは身近な河川沿いの緑が市民生活の憩いや、うるおいを与えるものとして、河川空間の果たす役割は大切なものです。阿武隈川沿いの緑地の保全、また、河川敷を利用した緑地や散策道の整備を図っていくことも必要です。

本市では、「ささや親水公園」、「田沢親水公園」、「馬洗川溪流」などがあり、市民の憩いの場として整備を行いました。子供から大人まで、幅広く利用できる施設であり、川と自然とのふれあいによって、余暇利用や日常生活の疲れをリフレッシュできるものです。今後も河川等で、優れた自然と水辺を有しているものについては、周辺を利用し、市民が気軽に親しめる「水辺空間づくり」を進めていく必要があります。

●未来へのメッセージ

阿武隈川に限らず河川は、私たちの生活環境にかかわりが大きく、河川環境を守り続けていくことが、将来と子孫への大切な遺産であります。

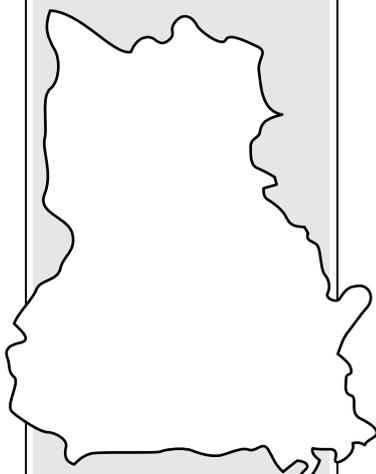
さらに、そこに生きる人たちが絶対的に必要とするのが、水であります。河川水質をより良く守り続けていくことも私たちの重要な役割と考えられます。

河川環境保全への取り組みを積極的に行い、安達太良の山々と阿武隈の清い流れが作り出す自然豊かな環境の中で、築かれてきた歴史と文化を後世へ継承し、かつ緑と清い水を大切に、人が健康で生きがいのある暮らしを守っていくことが、私たちに託された使命なのです。

福島市



福島市長
小林 香



面積 767.74km²
人口 283,147人
(H26・9・1 現在)



▲地蔵原堰堤

●福島市と阿武隈川

(自然)

阿武隈川は、市域の東方を大きく蛇行して流れ、その間、飯野・立子山地区から渡利地区にかけ、美しい阿武隈峡（県指定名勝、天然記念物）が見られます。阿武隈峡は川の浸食により形成された絶壁の峡谷や奇岩、怪岩などが連なっており、蛇骨岩・大日岩などの壮大な自然景観を見せています。また国指定の史跡であり江戸時代の舟運の歴史を物語る鮎滝渡船場跡や福島市景観100選にも選ばれている蓬萊岩などの史跡、景勝地が多くあり約2kmにわたり阿武隈峡遊歩道が整備されています。

(歴史)

福島盆地西側には吾妻連峰が広がり、ここを源とする荒川、松川、摺上川等の河川が阿武隈川に流入しており、それらの川沿いには、数多くの遺跡や古墳が見られ、原始・古代より人々と深い関わりを有していることがわかります。

また、阿武隈川では、江戸時代の寛文年間に舟運が本格的に始められたとされており、舟運が盛んになると福島には年貢米や各地の産物が集まり大いに栄えました。舟運は大正時代まで存続しましたが、明治時代に入り東北本線開通により衰退していきました。

阿武隈川は古来より氾濫を繰り返しており、そのたびに、流路を変更してきました。大洪水の歴史としては近世では寛永14年（1637）享保8年（1723）の大洪水の被害が大きく、最近では昭和61年8月の台風や、平成10年8月の長期間にわたる大雨による洪水が記憶に新しいところですが、平成の大改修により氾濫被害が軽減されています。

(親水空間)

市内には「阿武隈川の河畔」を略した造語で、「隈畔」と呼ばれる場所があります。大正時代の頃から、現在の県庁裏の阿武隈川左岸付近を指すように使われ、背後に流れる阿武隈川の風光明媚な景観は常に人々の心をいやしており、毎年、灯籠流しや花火大会が実施されています。

支川荒川の堤防沿いに、荒川桜つつみ公園があり、春には200本以上の桜が咲き、花見の名所にもなっています。この公園で開催される「荒川フェスティバル」は毎年5月の恒例行事となっており、各種イベントが行われています。さらに上流部には地蔵原堰堤などの歴史的治水・砂防施設があり、これらを巡る散策路や渡河施設などが整備されていることから、ウォークラリーなどのイベントが開催されています。

●取り組みの現状・課題等

(治水関連)

安全・安心そして快適な水辺環境を創出するために、河川・水路の適切な整備や維持管理等を行うとともに、国・県の管理する河川の整備促進を要望し、洪水や豪雨などによる氾濫や浸水被害を軽減することにより、市民が安全で安心して生活できるよう、河川・水路の整備を進めています。

また、災害から市民の生命を守るため、平成24年に町内会や自主防災組織との協働により洪水ハザードマップを15年ぶりに改定し、同時に土砂災害ハザードマップも作成しました。現在は、学校・町内会等への出前講座を行い啓発活動を行っています。また、住民自らが避難行動を行うことができるよう、洪水標識や避難所標識、浸水履歴標識を主要な箇所に設置する「まるごとまちごとハザードマップ」を進めています。



▲蓬莱岩と阿武隈峡

これまで、記録的な豪雨をうけてきましたが、平成の大改修により、外水のはん濫被害は軽減されました。摺上川ダムの貯水機能も大変効果的ですが、近年増加している記録的な局地的ゲリラ豪雨や都市化に伴う田や畑などの貯水力の低下などによって、内水の被害が課題となっています。

（親水空間の活用）

東日本大震災の影響により、親水空間を利用した啓発イベントや河川クリーンアップ等活動の制約などがありますが、放射線による影響を考慮しながら、市民との協働による河川美化活動や花咲く水辺づくり、荒川フェスティバルなど河川環境保全の啓発活動を実施しています。

（河川環境）

公共用水域の水質汚濁の状況を常時監視するため、阿武隈川支流の17河川23地点で毎月1回の水質調査を実施しているほか、水質汚濁防止法に基づき届出がされた特定事業場等からの排水水について立入調査等により指導監視を行い、排水基準不適合又はそのおそれがある事業場に対しては、行政指導を行っています。また、河川の水質汚濁が進み、住宅が密集している地域において学習会を開催し、生活排水対策に関する啓発活動を推進しています。

なお、今後は河川等の水質悪化を防止するため、公共下水道、農業集落排水事業及び合併処理浄化槽の普及推進を図っていく必要があります。

●未来へのメッセージ

阿武隈川は、福島市の東方を中心市街地などを通りながら大きく蛇行して流れています。支川を含め、古くから人々は阿武隈川と大きな関わりを持って生きてきました。時には人々に日常の穏やかな流れや、壮大な自然景観を見せる風景として、また、田畑を潤す恵みの水や飲料水などとして、時には人々の生活を奪う氾濫する川として。

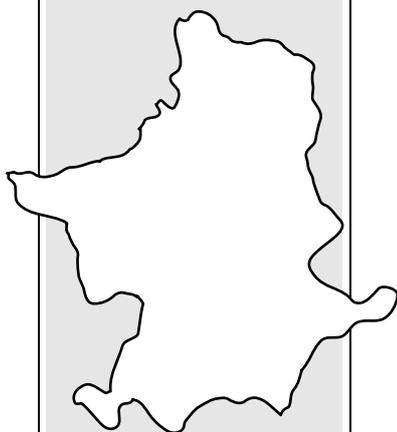
昨今の水道の整備や洪水から守る堤防の整備、舟運や川漁などの文化の衰退といった時代の流れ・生活様式の変化、あるいは、東日本大震災による放射能の影響などにより、川との関わりが希薄化してきています。

安全で安心な地域づくりのために、近年の気候変動によるゲリラ豪雨対策、防災面での整備は進めていかなければなりません。今後この雄大なすばらしい「阿武隈川」とともに生きていくために河川環境保全の取り組みや、川と人々がふれ合えるような魅力的な親水空間の創出についても、積極的に取り組んでいかなければならないと考えます。

伊達市



伊達市長
仁志田 昇司



面積 265.10km²
人口 62,222人
(H26・9・1 現在)



▲猿跳岩付近

●伊達市と阿武隈川

本市の主要河川は、市内北西部を縦断して北上する阿武隈川水系に属しており、摺上川、産ヶ沢川、広瀬川、東根川、山舟生川が阿武隈川に合流しています。

この阿武隈川は、農業での利水はもとよりこと、市民生活にもその川辺の景観により潤いを与え、本市の不可欠な要素となっています。

まず、農業においては、広瀬川の水を堰入れる砂子堰が江戸初期に完成し、梁川町堰本地区及び保原町の水田に大変な恩恵をもたらしましたが、渇水の際には水争いも生じていました。この渇水対策として阿武隈川の水を堰入れる東根堰が昭和19年に完成しています。この灌漑事業は、世紀の大事業でありましたが、本市の農業に多大な恩恵をもたらしております。また、その曲がりくねった姿は、洪水をもたらすと同時に、流域に肥沃な土壌をもたらし、今もって様々な作物を実らせています。

物流面においては、江戸時代前期に、舟運が開始し、梁川河岸・中瀬河岸・伏黒河岸などには河岸蔵や河岸問屋が置かれ、物流の面で大きな役割を果たした時期もありました。今でこそ、舟運はありませんが、東日本大震災時に、多くの橋梁が利用できなくなったことを思い返すと、災害時の利用といった別の面から光を当てることが可能だったかもしれません。

●水害への備え

阿武隈川は大正8年より直轄河川改修として治水事業が実施されてきました。その後、数度、洪水に見舞われていますが、特に昭和61年8月5日の集中豪雨、いわゆる8.5水害においては、急激な水位の上昇により、阿武隈川と広瀬川の堤防が破堤し、梁川地域の広範囲で浸水被害が発生しました。この水害においては、380世帯が床上浸水し、1,300人を超える方が避難しました。

直轄河川災害対策特別緊急事業により広瀬川の堤防が改修されました。更には、平成10年8月末豪雨を受けて、「平成の大改修」により、無堤地区の解消と堤防の嵩上げ、補強等が行われました。

また、150年に1回程度起こる大雨を想定し、河川が破堤、はん濫した場合に想定される浸水の状況をシミュレーションをした、浸水想定区域・冠水危険箇所マップ（洪水ハザードマップ）を作成し、各家庭に配布しております。

市民に対しては、各地域の自主防災組織の設立促進と既設組織の育成を図るため、自主防災組織資機材整備等事業補助金要綱を策定し、地域コミュニティの強化による防災体制の構築を推進しています。

●水質保全への取組み

広瀬川の支流小国川については、毎年続けて水質環境基準（BOD）が超過していました。そこで、広瀬川流域を「生活排水対策重点地域」として指定し、合併浄化槽の設置促進や流域自治体担当で構成する協議会などの活動を



▲秋の阿武隈川

通じて、水質浄化に取り組んできました。その結果、現在で着実に改善されつつあり、平成21年度以降は環境基準を下回っています。

●今後の課題

・治水対策について

「平成の大改修」による堤防の整備により外水による氾濫の被害は軽減されましたが、近年、ゲリラ豪雨が増加する傾向にあり、内水排水不良による浸水被害が増えている現状にあります。阿武隈川を管轄する福島河川国道事務所では、内水対策として排水機場の整備、排水ポンプ車の配備・運用、遊水池の整備や河床の掘削等を計画的に行っています。また、河川水位情報の提供もテレビやインターネットを等の様々なメディアを通して行われています。

今後は浸水想定区域内の災害時要支援者利用施設(高齢者、障害者、乳幼児等が利用する施設)での避難計画の策定や避難訓練の実施等を支援し、災害時に円滑かつ迅速に避難できるようにしていくことが課題となっています。

・水質保全について

保原地域を流れる古川では、未だ高いBOD値が検出されています。生活排水の流入が主な原因と考えられており、公共下水道や合併処理浄化槽の整備・普及により、計画的に生活排水処理を進めていくことはもとより、市民が行う環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働的取り組みを一層進めていく必要があります。